

研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善 ―深い学びにつながる授業づくり―

目次

第1	研究の概要	4
第2	研究の背景とねらい	5
第3	研究の方法	6
第4	研究の内容	
1	基礎研究	7
2	開発研究	8
3	検証授業	
(1)	小学校・理科（第5学年）	11
(2)	小学校・体育（第6学年）	15
(3)	中学校・社会（第1学年）	19
(4)	中学校・数学（第3学年）	23
(5)	高等学校・国語（第1学年）	27
(6)	高等学校・外国語（英語コミュニケーションⅠ）（第1学年）	31
(7)	知的障害特別支援学校小学部・国語（第5、6学年）	35
第5	研究の成果と今後の取組	39

<研究の成果とその活用>

1 研究の成果

- (1) 深い学びの分析
- (2) 「深い学びにつながる四つのステップ」の開発
- (3) 「深い学びにつながる四つのステップ」を用いた授業改善の進め方の検証
- (4) 「深い学びにつながる四つのステップ」を用いた指導計画の提示

2 研究成果の活用

- (1) 「都教委訪問モデルプラン」等による普及・啓発
- (2) 研究成果を取り入れた深い学びにつながる授業づくりの研修の実施
- (3) アクティブ・ラーニング推進校事業との連携

第1 研究の概要

研究主題	<p>「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善 —深い学びにつながる授業づくり—</p>
-------------	---

研究のねらい	<p>新学習指導要領に示された資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について、具体的な方策を明らかにする。特に、深い学びにつながる授業づくりに焦点を当てた授業改善の方法を提示することで、幅広い研究の普及・活用を目指す。</p>
---------------	--



研究の内容	<p>○深い学びにつながる授業づくりについて整理し、具体的方策を構築する。 ○具体的方策を踏まえた東京教師道場の2年次の部員による授業実践と協議を通して、児童・生徒の変容を検証し、授業改善の進め方を提示する。</p>
<p>深い学びにつながる授業づくり</p>	
<p>STEP 1 「深い学びの姿」の想定</p>	
<p><input type="checkbox"/> 単元（題材）で育てる資質・能力を明確にする。 <input type="checkbox"/> 単元（題材）を通して、どのような知識及び技能を関連付けていくのかを整理し、期待する児童・生徒の「深い学びの姿」を具体的に想定する。</p>	
<p>STEP 2 深い学びにつながるための単元（題材）の指導計画</p>	
<p><input type="checkbox"/> 想定した「深い学びの姿」につながるように、単元（題材）の指導計画を立てる。 <input type="checkbox"/> 児童・生徒理解、教科等横断的な視点、見方・考え方等に基づいて、指導の工夫を考える。</p>	
<p>STEP 3 授業の実施・観察</p>	
<p>授業の中で、児童・生徒のつぶやき、発言、記述、行動等を観察することで、想定した「深い学びの姿」につながるような授業を展開する。</p>	
<p>STEP 4 単元（題材）の振り返り</p>	
<p>授業の中で、想定した「深い学びの姿」につながったか、資質・能力が身に付いたか、児童・生徒の具体的な姿から検証し、改善に生かす。</p>	



研究の成果と今後の活用	<p>1 研究の成果 (1) 深い学びの分析 (2) 「深い学びにつながる四つのステップ」の開発 (3) 「深い学びにつながる四つのステップ」を用いた授業改善の進め方の検証 (4) 「深い学びにつながる四つのステップ」を用いた指導計画の提示 2 研究成果の活用 (1) 「都教委訪問モデルプラン」等による普及・啓発 (2) 研究成果を取り入れた深い学びにつながる授業づくりの研修の実施 (3) アクティブ・ラーニング推進校事業との連携</p>
--------------------	---

第2 研究の背景とねらい

1 新学習指導要領の内容

小学校・中学校の新学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）及び特別支援学校小学部・中学部の新学習指導要領（平成29年4月告示 文部科学省）では、各教科等の指導に当たっては、「知識及び技能が習得されるようにすること」、「思考力、判断力、表現力等を育成すること」、「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」が偏りなく実現されるように、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童又は生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うことが示された。

また、小学校・中学校の新学習指導要領解説総則編（平成29年6月・7月 文部科学省）では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たり、以下の6点に留意して取り組むことが重要であると示された。

- ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組み蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと。
- イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。
- ウ 各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。
- エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。
- オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。
- カ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その着実な習得を図ることを重視すること。

2 学校現場における課題

東京教師道場の授業研究や都教委訪問などの授業観察及び國學院大学の田村 学教授の指導から、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進める際の学校現場における次のような実態を把握することができた。

- ・「アクティブ・ラーニング」が一つの指導法の型として捉えられたり、話し合いを取り入れれば主体的・協働的と捉えられたりする等、「活動あって学びなし」の授業が多く見られること。
- ・主体的・対話的な学びをすれば深い学びになると誤った認識をして、深い学びを曖昧なまま形式的に捉えていること。

前述の新学習指導要領の内容や学校現場における実態を課題として捉え、研究のねらいを次のように設定した。

新学習指導要領に示された資質・能力を育むための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について、具体的な方策を明らかにする。特に、深い学びにつながる授業づくりに焦点を当てた授業改善の方法を提示することで、幅広い研究の普及・活用を目指す。

第3 研究の方法

1 基礎研究

- (1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善についての理解
- (2) 「深い学びの姿」を想定した授業づくり

2 開発研究

「深い学びにつながる四つのステップ」を作成した。

STEP 1 「深い学びの姿」の想定
<input type="checkbox"/> 単元（題材）で育てる資質・能力を明確にする。 <input type="checkbox"/> 単元（題材）を通して、どのような知識及び技能を関連付けていくのかを整理し、期待する児童・生徒の「深い学びの姿」を具体的に想定する。
STEP 2 深い学びにつながるための単元（題材）の指導計画
<input type="checkbox"/> 想定した「深い学びの姿」につながるように、単元（題材）の指導計画を立てる。 <input type="checkbox"/> 児童・生徒理解、教科等横断的な視点、見方・考え方等に基づいて、指導の工夫を考える。
STEP 3 授業の実施・観察
授業の中で、児童・生徒のつぶやき、発言、記述、行動等を観察することで、想定した「深い学びの姿」につながるような授業を展開する。
STEP 4 単元（題材）全体の振り返り
授業の中で、想定した「深い学びの姿」につながったか、資質・能力が身に付いたか、児童・生徒の具体的な姿から検証し、改善に生かす。

3 検証授業

(1) 検証内容

「2 開発研究」で開発した「深い学びにつながる四つのステップ」に沿って、単元を通しての授業観察・協議を基に、検証授業を行った。

(2) 検証授業者

東京教師道場の2年次の部員

(3) 検証授業協力校

- | | |
|----------------|---------------------|
| ア 台東区立千束小学校 | (理科・第5学年) |
| イ 立川市立上砂川小学校 | (体育・第6学年) |
| ウ 江東区立第三砂町中学校 | (社会・第1学年) |
| エ 国分寺市立第五中学校 | (数学・第3学年) |
| オ 東京都立光丘高等学校 | (国語・第1学年) |
| カ 東京都立保谷高等学校 | (外国語・第1学年) |
| キ 東京都立七生特別支援学校 | (知的障害小学部：国語・第5、6学年) |

第4 研究の内容

1 基礎研究

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善についての理解

新学習指導要領（平成29年3月告示）総則「第3 教育課程の実施と学習評価 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（1）」から、以下のように「主体的・対話的で深い学び」を整理した。

「主体的・対話的で深い学び」は、これまで実際に積み重ねられてきた授業実践の中から、効果的な取組につながっている授業の分析を行い、教師がどのように児童・生徒の学びの姿を捉え、授業改善を図っていくかという視点を抽出したものである。

この「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善は、必ずしも1単位時間の授業だけでなく、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して進められるものである。例えば、主体的に学習に取り組めるように学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくり出すために、児童・生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった観点で授業改善を進めることが重要となる。すなわち、ここでいう授業改善とは、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、単元や題材などの内容や時間のまとまりをどのように構成するかということまで見通して授業を構想することに他ならない。

(2) 「深い学びの姿」を想定した授業づくり

新学習指導要領解説総則編（平成29年6月・7月）「第3章第3節 教育課程の実施と学習評価 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（1）主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」から、深い学びについて以下のように整理した。

深い学びについて留意すべき点は、習得・活用・探究の過程において、学習の対象となる物事をどのような視点で捉えどのような考え方で思考していくかは、各教科等の特質に応じて異なるということである。例えば、国語では「言葉による見方・考え方」、算数・数学では「数学的な見方・考え方」といった、各教科等の特質に応じた物事の捉え方や考え方を学習の中で働かせていくことができるように各教科等の授業研究を積極的に活用し、更なる創意工夫につなげていくことが求められる。

基礎研究を進めるに当たって、國學院大学の田村 学教授を講師として招へいし、指導・助言を受けた。田村教授の指導・助言を基に、本研究では、各教科等における「見方・考え方」を次のように捉えた。

「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」であり、「見方」は、「教科特有の事象の捉え方」、「考え方」は「教科特有のアプローチの仕方」と定義した。

また、田村教授からは、「重要なことは、一回一回の授業の中で『主体的・対話的で深い学び』の全てを漏れなく取り入れる必要はなく、単元や題材のまとまりの中で、こうした視点を適切・効果的に配置していくことである。」との示唆をいただいた。

以上のことから、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を進めるためには、児童・生徒の実態を踏まえながら、バランスよく単元や題材などの内容や時間のまとまりを構成していくための準備が必要となる。その際、教科を学ぶ意義や実生活との関わりを踏まえたり、知識や技能を活用した場面を設定したりするなど、具体的な「深い学びの姿」を想定した上での授業づくりが重要であると考えた。

2 開発研究

深い学びにつながる授業づくりを進めるためには、単元や題材など内容や時間のまとまりを通して、育てたい資質・能力や「深い学びの姿」を具体的に想定して授業を行うことが重要である。そこで、本研究では深い学びにつながる授業づくりとして、次のような「深い学びにつながる四つのステップ」を開発した。

(1) **STEP 1** 「深い学びの姿」の想定

単元や題材を通して育てたい資質・能力を明確にした上で、単元や題材を通して、どのような知識及び技能を関連付けていくのかを整理し、期待される「深い学びの姿」として、具体的な児童・生徒の姿を想定する。

「深い学びの姿」を具体的に想定するためには、単元や題材で新たに学ぶ知識及び技能だけでなく、既に児童・生徒に身に付いている知識及び技能やもっている情報、生活経験、そこから生まれる考えや思いも含めて、それらがどのように関連するかをイメージするようにする（図1）。

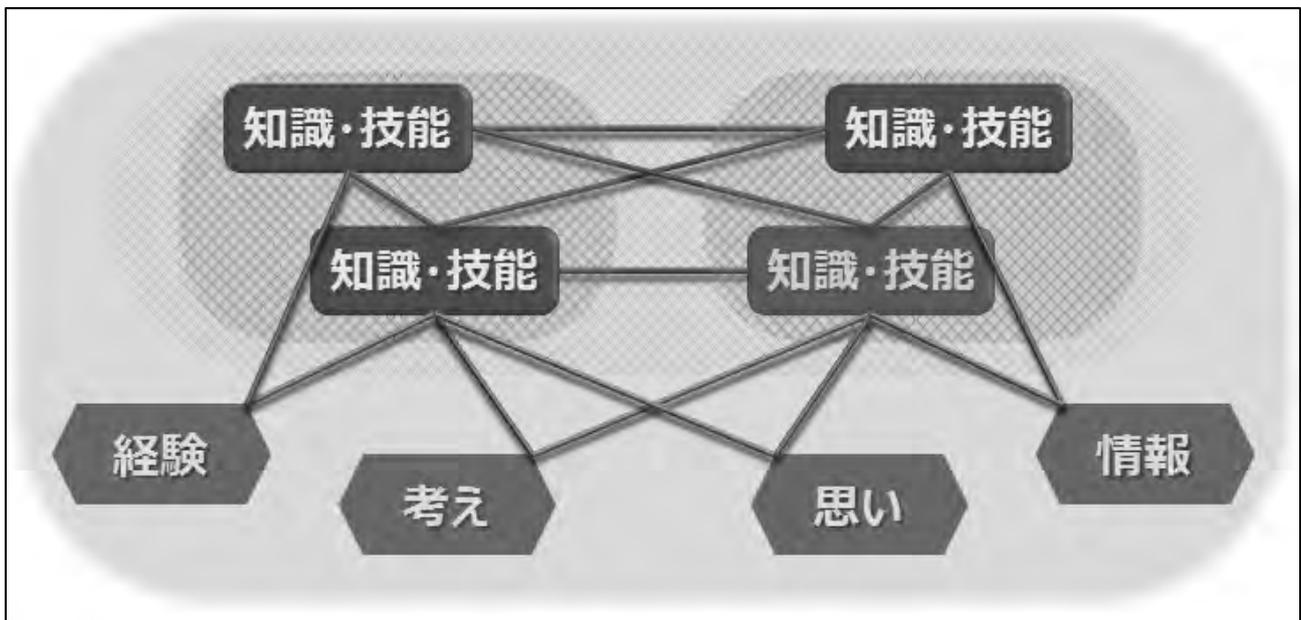


図1 「深い学びの姿（知識及び技能の関連付けのイメージ）」

そこで、「深い学びの姿を想定する際の構成図」（図2）を使って「本単元（題材）で育てたい資質・能力」、「関連する既習事項」、「本単元（題材）における見方・考え方」、「〇〇科における深い学び」の各項目に記載した内容を基にして「本単元（題材）における『深い学びの姿』」を見いだしていく。

各項目の記載に当たっては、児童・生徒の実態及び新学習指導要領の趣旨を踏まえて整理する。なお、高等学校については、小・中学校の新学習指導要領に準じて捉えていくこととした。

具体的な「深い学びの姿」の例として、小学校第6学年の体育科・ボール運動ゴール型「バスケットボール」の学習においては、「前学年のハンドボールの学習で習得した、ボールを持たないときの動きの技能を発展させ、味方からボールを受けるための動きとしての技能を身に付けている」姿等を想定することができる。

また、高等学校第1学年の国語科・読むことの学習においては、「文章の内容を叙述に即して理解したことと、これまで蓄積されてきた読解の知識や生活経験等を関連付けて、作者の意図を捉えている」姿等を想定することができる。

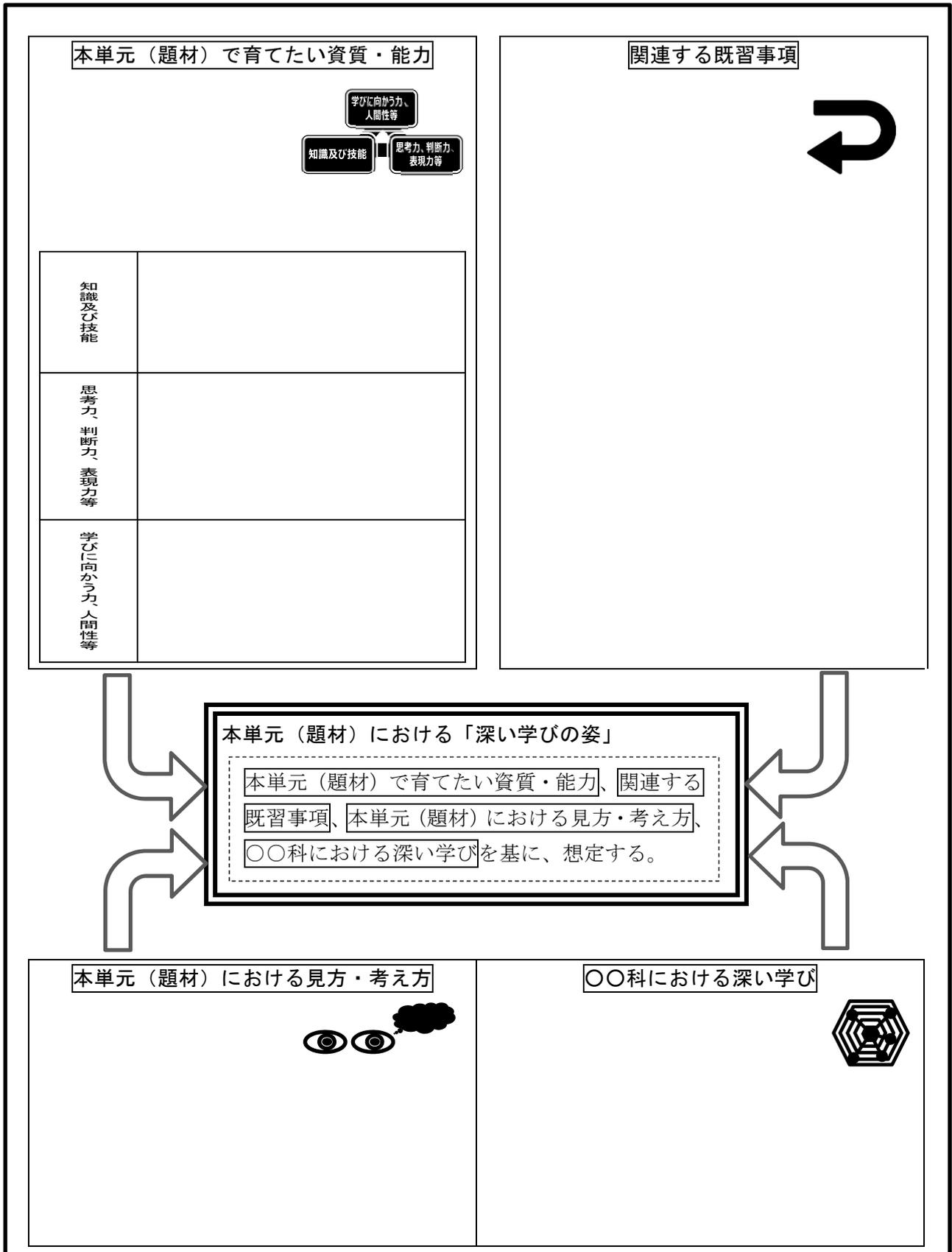


図2 「深い学びの姿を想定する際の構成図」

(2) **STEP 2** 深い学びにつながるための単元（題材）の指導計画

想定した児童・生徒の「深い学びの姿」につながるような単元（題材）の指導計画を立てる。表1に示したように、目標、内容、期待する「深い学びの姿」の想定、指導の工夫について時系列に整理

し、単元（題材）の指導計画を作成する。

児童・生徒理解、教科等横断的な視点、見方・考え方等に基づき、言語活動、板書、発問、ICT機器、教材、ワークシート、場の設定、時間配分、グループ編成、言葉掛け等の指導の工夫を考える。

期待する「深い学びの姿」は、STEP 1で想定した本単元（題材）における「深い学びの姿」を基に、単元（題材）の中でその姿が見られると考えられる時間に、更に具体的な姿として想定し、記述していく。

表1 「深い学びにつながるための単元（題材）の指導計画」

時	目標	内容	期待する「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1 2 3 ⋮	*この欄には、その時間の目標を記述する。	*この欄には、主な学習内容・学習活動を記述する。	*この欄には、STEP 1で想定した単元（題材）における「深い学びの姿」を基に、期待する「深い学びの姿」を更に具体的に想定して、記述する。 (ノートやワークシートの記述例、発言、つぶやき等)	*この欄には、想定する「深い学びの姿」につながるための指導の工夫を記述する。

(3) STEP 3 授業の実施・観察

STEP 2の計画を基に授業を実践し、授業の中で、児童・生徒のつぶやき、発言、記述、行動等を、想定した「深い学びの姿」を視点として観察・把握する。

想定していた「深い学びの姿」が授業の中でどのように表れたのかを、児童・生徒の具体的な姿で捉えるようにする。その際、想定していた「深い学びの姿」だけではなく、想定を超えた「深い学びの姿」があることを念頭に置いて、授業者や観察者が児童・生徒の姿を的確に捉えていくことが重要である。

(4) STEP 4 単元（題材）全体の振り返り

児童・生徒のつぶやき、発言、記述、行動等具体的な姿から、想定した「深い学びの姿」につながることができたか、資質・能力が身に付いたかを検証し、改善に生かす。

想定していた「深い学びの姿」や想定を超えた「深い学びの姿」と、深い学びにつながるための指導の工夫等を、単元（題材）全体の学習過程と関連付けて振り返り、次の指導に生かす。

3 検証授業

「2 開発研究」で開発した「深い学びにつながる四つのステップ」に沿って、単元を通しての授業観察・協議を基に、東京教師道場の部員が授業者となって七つの検証授業を行った。各検証授業の内容を、STEP 1からSTEP 4に沿って4ページずつにまとめた。

(1) 小学校・理科（第5学年）

単元名	電磁石の性質 A(3) 電流がつくる磁界
-----	----------------------

STEP 1 「深い学びの姿」の想定

本単元で育てたい資質・能力 <div style="text-align: center;"> </div>		関連する既習事項 <div style="text-align: right;"> </div>
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> 電流の流れているコイルは、鉄心を磁化する働きがあり、電流の向きが変わると、電磁石の極も変わることを理解すること。 電磁石の強さは、電流の大きさや導線の巻き数によって変わることを理解すること。 	【第3学年】「A(4)磁石の性質」 ○磁石に引き付けられる物と引き付けられない物があること。また、磁石に近づけると磁石になる物があること。 ○磁石の異極は引き合い、同極は退け合うこと。 【第3学年】「A(5)電気の通り道」 ○電気を通すつなぎ方と通さないつなぎ方があること。 ○電気を通す物と通さない物があること。 ○差異点や共通点を基に、問題を見いだす力 【第4学年】「A(3)電流の働き」 ○乾電池の数やつなぎ方を変えると、電流の大きさや向きが変わり、豆電球の明るさやモーターの回り方が変わること。 ○既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> 電流がつくる磁力について、電流がつくる磁力の強さに関する条件についての予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、表現すること。 	
学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> 電流がつくる磁力について、予想や仮説を基に、解決の方法を発想し、主体的に問題解決しようとする態度 	

本単元における「深い学びの姿」

- ①コイルに電流を流すと鉄心が磁石になり、電流の向きを変えると極が変わることを調べている。
- ②コイルの巻き数を同じにして電流の大きさを変えたり、電流の大きさを同じにしてコイルの巻き数を変えたりすると、電磁石の強さが変わることを調べている。
- ③電磁石の性質を生かした物について、どのような仕組みになっているのか考え、説明している。

本単元における見方・考え方



電流がつくる磁界について、電流の大きさや向き、コイルの巻き数などに着目して、それらの条件を制御しながら調べる。

理科における深い学び



自然の事物・現象から問題を見だし、予想や仮説をもち、その解決方法を考えたり、知識を関連付けてより深く理解したりすること。

STEP 2 深い学びにつながるための単元の指導計画（全 10 時間）

時	目標	内容	期待する「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1	電磁石に電流を流したときに起こる現象について、興味・関心をもち、電流がつくる磁界の性質について調べる。	○電磁石が付いた3種類の釣り竿で、付いている磁石の極の向きと重さの異なる3種類の魚(タイ、マグロ、ジンベエザメ)を釣る体験から、釣り竿に付いている電磁石の働きとその違いに気付く。		○「電磁石と磁石はどのような違いがあるのか」、「どうすれば電磁石は強くなるのか」という問題が生まれるようにするために、釣れ方に違いが生まれる釣り竿と魚を準備する。
2	電流の流れているコイルには、鉄心を磁化する働きがあることを理解する。	○どのようなときにコイルは電磁石になるのか調べる。	○電流が流れているときは、鉄心が磁石のようになっていると理解している。	○「電磁石と磁石はどのような違いがあるのか」という問題について、電磁石と磁石の共通点と差異点を視点として問題解決に取り組ませる。
3	電磁石には極があり、電磁石の極は、電流が流れる向きによって変わることを実験結果から見いだす。	○電磁石の極について調べる計画を立て、実行する。	○電池をつなぐ向きを変えると極が逆になると理解する。	
4				
5	電磁石の強さは、コイルの巻き数によって変わることを実験結果から見いだす。	○コイルの巻き数と電磁石の強さの関係を調べる計画を立て、電流の大きさを同じにして、コイルの巻き数を変えて電磁石の強さを調べる。	○巻き数が多い方がクリップが多く付いたから、巻き数が多い方が、電磁石は強くなると考えている。	○「どうすれば電磁石は強くなるのか」という問題について、確かめたいことを確認して、条件を制御することを意識した実験計画を立てさせる。
6				
7	電磁石の強さは、電流の大きさによって変わることを実験結果から見いだす。	○電流の大きさと電磁石の強さの関係を調べる計画を立て、コイルの巻き数を同じにして、電流の大きさを変えて電磁石の強さを調べる。	○電流が大きい方がクリップが多く付いたから、電流が大きい方が、電磁石は強くなると考えている。	
8				
9	電磁石の性質を利用した物に興味・関心をもち、その仕組みについて電磁石の性質を基に考察する。	○ジンベエザメが釣れる釣り竿に改良する。	○コイルの巻き数や電流の大きさを変えて、電磁石の力を強くした釣り竿でジンベエザメを釣っている。	○電磁石の性質を利用した物が、なぜ電磁石の性質を利用しているのか、どのように電磁石の性質を利用しているのかについて考えたことを説明させるようにする。
10		○リニアモーターカーはなぜ動くのか考える。	○リニアモーターカーが電磁石を利用した物であることを知り、電磁石の性質を使って、リニアモーターカーが動く原理についての説明を考えている。	

STEP 3 授業の実施・観察

「深い学びの姿②」

コイルの巻き数を同じにして電流の大きさを変えたり、電流の大きさを同じにしてコイルの巻き数を変えたりすると、電磁石の強さが変わることを調べている。

第5時・第6時：電磁石の強さは、コイルの巻き数によって変わることを実験結果から見いだす。

第7時・第8時：電磁石の強さは、電流の大きさによって変わることを実験結果から見いだす。

問題 電磁石の磁力を強くするにはどうすればよいだろうか。
 予想 ①乾電池を増やして直列つなぎにする。14人
 理由 モーターの回転速さが速くなるから。
 ②鉄心にコイルを多く巻く。12人
 緑色のつりごおの巻数が多くて、強かたから。
 ③鉄心を増やす。3人
 全部の鉄心が引きつけるから。

方法 クリップをたてにつけて、つく数の違いを調べる。
 ①乾電池に、2こ直列の5かい
 ②緑色のつりごお、黄色・水色の5かい
 ③鉄心1本、2本、3本の5かい
 鉄心の数だけを変え、他の条件は変えない。

第1時の魚釣り体験で気付いたことを生かして見通しをもち、実験計画を立てた。

コイルの巻き数、電流の大きさだけでなく、鉄心の太さについても調べる計画を立てた。

第5時・第6時



第7時・第8時



第5時・第6時の実験でクリップを数えることに時間が掛かったため、大きいクリップを使うと実験が進めやすいという考えが生まれた。

実験を進めていく中で、乾電池が弱くなっているのではないかという児童の気づきがあり、電源装置へ移行した。

「深い学びの姿③」

電磁石の性質を生かした物について、どのような仕組みになっているのか考え、説明している。

第9時・第10時：電磁石の性質を利用した物に興味・関心をもち、その仕組みについて電磁石の性質を基に考察する。

字 ジンベエザメをつらう。
 方法 ・乾電池も2個直列つなぎにする。
 ・鉄心を4本にする。
 ・コイルを250回巻きにする。



一番重いジンベエザメを釣るには、電磁石の強さを強くするだけでなく、ジンベエザメの磁石の極と電磁石の極の向きを考えて、釣り竿を改良した。

これにより、第2時から第4時までに学習した内容と、第5時から第8時までに学習した内容とを関連付けることができた。

第10時



リニアモーターカーだけでなく、電磁石が利用されている様々な物を紹介し、電磁石の性質のよさに着目することができた。

リニアモーターカーには電磁石が利用されていることを、リニアモーターカーが浮いているという現象から理解することができた。

リニアモーターカーが動く仕組みについては、電磁石の性質から考え、説明するまでに至らなかった。

* アンダーラインは、STEP 1、STEP 2での想定を超えた「深い学びの姿」を示す。

STEP 4 単元全体の振り返り

【成果】

第1時の魚釣りの経験から、「電磁石と磁石はどのような違いがあるのか」、「どうすれば電磁石は強くなるのか」という問題をつくることができ、この問題を解決するための学習過程とすることができた。また、STEP 1で考えた本単元における「深い学びの姿」を基に、単元のどの場面でもどのような姿が見られるかを想定することを通して、児童がどのようなことに気付くかを考えて教材を準備することができた。例えば、第5時・第6時から第7時・第8時にかけて、児童が電流の大きさという条件を制御した実験をする中で、乾電池を使い続けると弱くなるという既有経験からの気付きが生まれ、それに対して電源装置で対応することができ、児童はより正確な実験を実施することができた。

【今後に向けて】

第9時・第10時で電磁石の性質の利用について考えることで、電磁石のよさや電磁石の性質について、より深い理解へとつながるようにすることが課題である。

その一例として、児童にとって興味ももちやすいリニアモーターカーを提示したことはよかったが、児童が電磁石の性質を踏まえてその仕組みについて考えたり、説明したりすることが十分にできなかった。リニアモーターカーの仕組みを考えることは難しかったので、リニアモーターカーが浮いている仕組みを児童に説明し、動く仕組みについては個人で考えさせるようにするとよかった。電磁石の性質を基に図や模型等を使って考え、説明する活動を設定する。この活動により、日常の事物・現象と学習内容との関連が実感でき、より深い学びとすることができる。

深い学びを引き出す問題の設定

新学習指導要領では、習得・探究・活用という学びの過程の中で、「深い学び」が実現されることを重視している。そして、小学校の理科では、問題解決の過程を通して、問題を科学的に解決するための資質・能力を身に付けることが目標に掲げられている。この問題解決の過程の出発点では、児童が自然の事物・現象に親しむ中で、問題を見いだしていくことが大切である。

本単元では、問題を見いだすために、「電磁石が付いた3種類の釣り竿で、付いている磁石の極の向きと重さが異なる3種類の魚（タイ、マグロ、ジンベエザメ）を釣る体験」を設定した。3種類の釣り竿は、a コイル50回巻き、b コイル100回巻き、c コイル50回巻きで乾電池のつなぎ方が逆のもの、を用意した。また、魚を釣り上げる部分については、

タイとジンベエザメには磁石のN極が、マグロには磁石のS極が付いており、魚の重さは、 $\text{タイ} < \text{マグロ} < \text{ジンベエザメ}$ の順に重くなっている。この釣り竿と魚を使った魚釣り体験を通して、電磁石は電流が流れていないと磁石のようにならないことや、釣れる魚と釣れない魚があることから、釣り竿の電磁石の強さに違いがあること、磁界の向きが違うこと等に気付くことができると考えた。

授業実践では、それらの児童の気付きを基に、「電磁石と磁石はどのような違いがあるのか」、「どうすれば電磁石は強くなるのか」という問題を設定することができた。

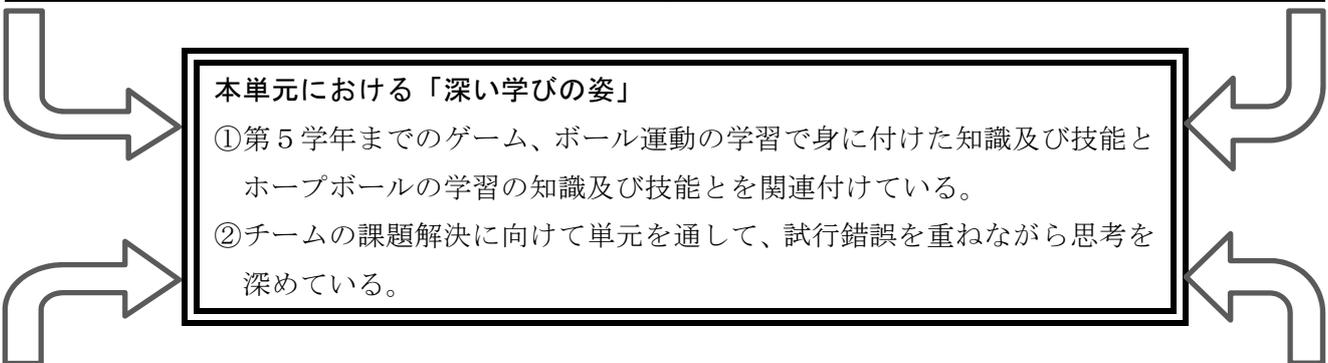
このように、児童・生徒の気付きや問題意識を基にした学習過程を展開することで、「深い学び」を引き出す契機とすることができる。

(2) 小学校・体育（第6学年）

単元名	ボール運動 ゴール型 ホープボール（バスケットボールを簡易化したゲーム）
-----	--------------------------------------

STEP 1 「深い学びの姿」の想定

本単元で育てたい資質・能力			関連する既習事項
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・近くにいるフリーの味方にパスをすること。 ・得点しやすい場所に移動し、守備者に取りられないようにパスを受けてシュートすること。 ・ボール保持者とゴールの間に体を入れて守備をすること。 		<p>【第4学年】（ゲーム：ゴール型）「ポートボール」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○コート内で攻守入り交じって、ボールを手で操作したり、空いている場所に素早く動いたりしてゲームをすること。 ○ゴールにシュートしたり、味方にボールをパスしたりすること。 <p>【第5学年】（ボール運動：ゴール型）「ハンドボール」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ボールを投げるといったボール操作をしたり、ボールを保持した人からボールを受けることのできる場所に動いたりして、攻守入り交じったゲームをすること。 ○攻撃側にとって易しい状況の中で、チームの作戦に基づいた位置取りやボール操作によって得点できること。
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールを工夫すること。 ・自己やチームの特徴に応じた作戦を選ぶこと。 ・課題の解決のために、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。 		
学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・ホープボールに積極的に取り組むこと。 ・練習やゲームの中で、互いの動きを見合ったり話し合ったりする際に、仲間の考えや取組を認めること。 ・用具の安全に気を配ること。 		



本単元における見方・考え方		体育科における深い学び	
<p>【見方】</p> <p>ホープボールの楽しさや喜びを味わうことや体力の向上につながっていることに着目する。</p> <p>【考え方】</p> <p>ホープボールをするだけでなく「見る」、「支える」、「知る」など、自己の適性等に応じて、ホープボールとの多様な関わり方について考えること。</p> <p>*見方・考え方を働かせる学習過程を工夫することにより資質・能力がより豊かになる。</p>		<p>主体的・対話的な学びの過程を通して、自己の運動についての課題を見付け、解決に向けて試行錯誤を重ねながら思考を深め、よりよく解決するための深い学びを促す。</p>	

STEP 2 深い学びにつながるための単元の指導計画（全8時間）

時	目標	内容	期待する 「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1	ホープボールのルールを知り、ゲームをする。	○学習内容の確認 ○ルールの確認 ○試しのゲーム① ○試しのゲーム②	○試しのゲームを行う中で、「メンバーを前半、後半で分けることで、作戦面の振り返りがしやすくなると思うよ。」等、学習の進め方やルールを知ろうとしている。	○「ホープボール学びの地図」を掲示するとともに学習カードにも入れることで、8時間の学習の進め方を知り、見通しをもたせる。
2	みんなが楽しめるルールを考え、ゲームをする。	○振り返り① ○試しのゲーム③ ○振り返り②		
3	効果的な攻め方を知り、ゲームをする（シュートを中心とする。）。	○学習内容の確認 【総当たり戦】 ○ゲーム① ○振り返り①	○「ボールを受け取るための動き方は、5年生でやった『ハンドボール』と似ているね。」「ボールをもらうためには、相手がいない場所（スペース）に動くと上手くいくね。」等、既習事項の知識及び技能と今回の学習の知識及び技能とを結び付けようとしている。	○前学年のハンドボールで扱ったボールを受けるための動きの段階表を掲示し、思い出させたり、ゲームを通して児童が見付けた効果的な攻め方をイラストとともに掲示したりすることで、後のチームの特徴に応じた作戦づくりにつなげられるようにする。
4	効果的な攻め方を知り、ゲームをする（パスを中心とする。）。	○ゲーム② ○ゲーム③ ○振り返り②		
5	チームの特徴を知り、ゲームをする。	○学習内容の確認 ○作戦の確認 【総当たり戦】 ○ゲーム① ○振り返り① ○ゲーム② ○ゲーム③ ○振り返り②	○「○○さんは、フリーゾーンからのシュートが上手だから、○○さんが攻撃専門プレイヤーになったときには、ボールを取ったらすぐに渡そう。そしてシュートをする。」等、単元前半で身に付けた知識及び技能を結び付けている。	○チーム一人一人のよさをカードに毎時間記録させることで、チーム全体のよさとして捉えられるようにする。
6	チームの特徴に合った作戦を考えて、ゲームをする。	○学習内容の確認 ○作戦の確認 【対抗戦】 ○ゲーム① ○振り返り① ○ゲーム② ○振り返り② ○ゲーム③ ○振り返り③	○「○○さん、相手に守備されているときは、横に動いたり、相手にフェイントをかけたりすると、ボールをもらいやすくなるよ！」等、これまでの学習経験からゲームの特性に応じた動き方について、理解が深まっている。	○これまで学習してきた効果的な攻め方の活用をさせたり、各チームの課題解決につながるような助言をチームごとに行ったりし、各チームの特徴に応じた作戦が立てられるようにする。
7		○振り返り② ○ゲーム③ ○振り返り③	○「私たちの作戦は、『パスをつなぐことができる』だから、パスをしたらゴールに向かって、空いている場所にすぐに動こうね。」等チームの特徴を的確に把握し、作戦に結び付けている。	○ゲーム間にチームでの振り返りの時間を設け、立てた作戦が効果的であったかゲームを振り返って話し合うことができるようにする。
8		○振り返り③		

STEP 3 授業の実施・観察

「深い学びの姿①」

第5学年までのゲーム、ボール運動の学習で身に付けた知識及び技能とホープボールの学習の知識及び技能とを関連付けている。(第6時～第8時)



第3時～第5時で効果的な攻め方を全体で出し合ったことで、シュート・パスなどのボール操作とボールを持たないときの動きとを関連させながら、どのチームも単元後半には作戦を立てることができた。どう動けばよいか具体的になった作戦となっており、これまでの学習の積み重ねが感じられた。

「深い学びの姿②」

チームの課題解決に向けて単元を通して、試行錯誤を重ねながら思考を深めている。(第7時)



単元前半にはなかなか勝てなかったチームがあったが、毎時間チームでの振り返りを積み重ねたことで、自分たちのチームの特徴を的確に分析し、作戦に反映することができた。この時間のこのチームのゲームでは、バウンドパスを巧みにつなぎながらシュートにつなげていた。明らかに単元前半と比べると、動きの質が高まっていた。

「新たに見られた深い学びの姿」(第7時・第8時)



自分のチームの特徴に応じた作戦を実行しようとしても、相手チームによって効果的に作用したり、失敗してしまったりすることがあった。そこで、相手チームの特徴について話し合ったり、作戦を複数立て、使い分けたりするという姿も見られた。STEP 1の深い学びの姿の想定を更に発展させた、新たに見られた深い学びの児童の姿と言える。

* アンダーラインは、STEP 1、STEP 2での想定を超えた「深い学びの姿」を示す。

STEP 4 単元全体の振り返り

【成果】

第5学年の既習事項である知識及び技能と本単元の前半（第1時～第5時）で身に付けた知識及び技能とを関連させながら後半の作戦を立てることや、ゲーム中の動きに生かすことができた。

このような深い学びの姿が児童に見られたため、STEP 1での深い学びの想定とSTEP 2での深い学びにつながるための単元の指導計画の有効性が検証できた。

また、各チームの作戦や個人のめあてを整理し、一覧表にまとめたことで、教師が各チームの課題や個人の目標を確実に把握することができた。この一覧表を活用しながら、ゲーム中に的確な助言や思考を促す発問をすることができ、児童がチームの作戦や個人のめあてを達成する上で効果的であった。

【今後に向けて】

- 攻撃側の数的優位になるようなゲームにしたが、攻撃側・守備側同数でも攻撃側の数的優位になるような局面を意図的につくれるとよい。さらに、単元後半だけでなく、次単元のボール運動ゴール型サッカーや中学校の球技などでも生かせるとよい。
- チームの課題を的確に把握することで、その解決方法も考えやすくなる。単元前半の各チームの課題を捉える活動を充実させることで、深い学びにつなげていきたい。
- ボール運動においては、ゲームのルール設定が児童の深い学びと強い関連を示す。期待する動きを想定していても、それを行えるようなルールになっている必要がある。一般的には、単元前半で児童の考えを生かしながら学級全体でルールをつくっていくが、教師の期待している深い学びにつながるよう、教師が見通しをもちながら児童の考えをうまく取り入れたルールづくりをしていきたい。

深い学びが表れた作戦と個人のめあての変遷

時間	第2時	第3時	第4時	
チームの作戦	一人一人がボールを持ち、シュートをする。	一人一人がボールをもらえるように工夫する。	なるべく速くボールをゴール前に運ぶ。	*第1時は、試しのゲームを行い、ゲームを知ることが学級全体のねらいであるため、作戦は立てていない。
個人のめあて(○さん)	ボールをもらったらなるべくシュートを打つ。	工夫してボールをもらう。	みんなが取りやすいパスをする。	
時間	第5時	第6時	第7時	
チームの作戦	コートいっぱいを使って攻める。	相手がボールを持っている際にプレスをかける。	ボールをもらえるように動き、プレスをかける。	プレスをかけて次の攻撃につなげる。
個人のめあて(○さん)	みんながシュートできるようにボールを運ぶ。	ディフェンスで、相手にプレスをかける。	相手にプレスをかけながらも、攻撃を意識する。	フェイントを使って、パスをしながら運ぶ。

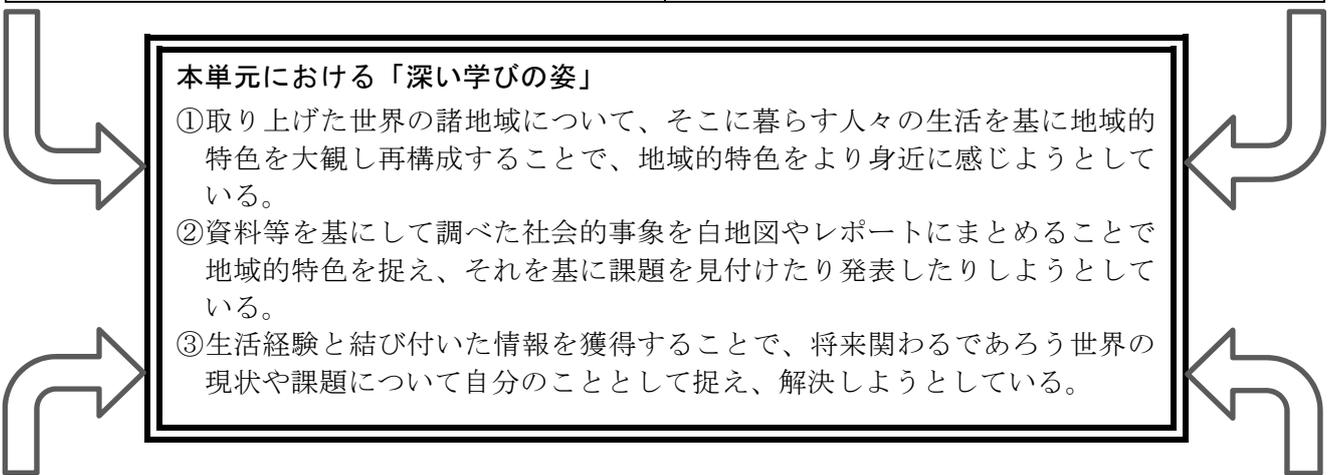
毎時間、チームの作戦とそれに基づく個人のめあてを立てさせていた（上記の表は、その一部）。期待する「深い学びの姿」を想定して、授業を行ったことで、児童が考えているチームの課題及び個人のめあてが変遷していった。作戦やめあての内容を見ると、教師が想定していた「深い学びの姿」が表れている。意図的な教師の言葉掛けや身に付けた知識及び技能を更に向上させられるような指導計画を立てたことで、毎時間の学習を積み重ねるごとに作戦とめあての質が向上した。

(3) 中学校・社会（第1学年）

単元名	世界の諸地域
-----	--------

STEP 1 「深い学びの姿」の想定

<p>本単元で育てたい資質・能力</p> <div style="text-align: center;">  </div>		<p>関連する既習事項</p> <div style="text-align: right;">  </div>
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> 我が国の国土とともに世界の諸地域における地理に関して理解すること。 地図や景観写真などの諸資料から、地理に関する情報を効果的に収集する・読み取る・まとめる技能を身に付けること。 	<p>【小学校第3学年及び第4学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○県（都、道、府）内の人々の生活や産業と外国との関わり <p>【小学校第5学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○食料の中には外国から輸入しているものがあること。 <p>【小学校第6学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活の様子
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> 地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、地域に見られる課題を把握し、複数の立場や意見を踏まえて選択・判断したりすること。 趣旨が明確になるように内容構成を考え、自分の考えを論理的に説明したり、それらを基に議論したりすること。 	<p>【中学校第1学年】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地球儀や地図の活用、世界の地域構成の大観 ○世界各地における人々の生活の様子とその変容 ○世界の諸地域について、それぞれの州の地域的特色
学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> 日本や世界の諸地域、自分たちが生活している身近な地域に関する社会的事象について主体的に調べ分かれようとして、課題を意欲的に追究する態度 地域の地理的な諸課題の解決を視野に、社会に関わろうとする態度 多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される自覚や愛情等 	



<p>本単元における見方・考え方</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること。</p>	<p>社会科における深い学び</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p>主として用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、主として社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得すること。</p>
---	---

STEP 2 深い学びにつながるための単元の指導計画（全7時間）

時	目標	内容	期待する「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1	アジア州の自然環境の特色や地形について知る。	○地形について理解する。 ○地図、気候区分、気温と降水量の資料図などの資料から、アジア州の気候が多様であることを読み取る。		
2	産業の発展と人々の生活の関わりについて調べ、考察する。	○「東アジア」、「東南アジア」、「南アジア」、「中央アジア」、「西アジア」に分け、どのような産業が発達しているのかを予想する。 ○担当した地域について産業を中心に調べ、どのような地域であるかを考察する。	○「雨が多い地域と少ない地域では、生活にどんな違いが出るのだろう」等、前時の学習内容である多様な気候の影響を、人々の生活と関連させてイメージしようとしている。 ○「この地域では日本に〇〇を輸出しているよ」等、小学校での既習事項と結び付けて理解しようとしている。	○教科書や資料集の他に、ICT機器を用いてインターネット等を利用して調べる。
3				
4	自分の担当した地域について知る。	○前時までにとまとめた意見をテーマ班で交換し、自分の担当した地域がどのような地域であるかを知る。	○「なるほど、こういうつながりだったのか」や「△△アジアには…という特色があるけれど、◆◆アジアとは違う特色だね」等、自分が調べた地域とその他の地域を比較して、それぞれの地域的特色を捉えようとしている。	○ジグソー学習を行い、自分の担当箇所について責任をもって調べたり、他の生徒が調べたことから特色を捉えられたりできるようにする。
5	アジア各地域についての発表を聞き、アジア州の発展について情報を共有する。	○自分の調べた地域について発表をする。 ○自分の調べた地域以外の産業の発達とその背景についての発表を聞き、アジア州について理解を深める。		
6	アジア州について白地図にまとめを行い、産業や人々の生活を考える。	○アジア州の産業や人々の生活について、その特色を白地図にまとめる。	○他の生徒のまとめ方を評価し、よいところを取り入れようとしている。	○教室の中で互いにまとめた白地図を見て回り、よいと思ったものに付箋を貼らせて評価する。
7	アジア州が抱える課題をどのように解決していったらよいかを考える。	○今まで学習してきたことを基に、根拠を示してレポートを作成する。	○「自分がこの地域に住んでいたら…」等、自分のこととして課題を解決しようとしている。	

STEP 3 授業の実施・観察

「深い学びの姿①」

取り上げた世界の諸地域について、そこに暮らす人々の生活を基に地域的特色を大観し再構成することで、地域的特色をより身近に感じようとしている。(第5時)



前時の授業で、担当した地域について調べたことを意見交換し、深めた内容を元のグループに戻って発表し合っている(ジグソー学習の後半)。

発表を聞いている生徒はワークシートにメモを取りながら、疑問点については質問して、自分の生活体験との比較の上で地域的特色を理解しようとしている。

「深い学びの姿②」

資料等を基にして調べた社会的事象を白地図やレポートにまとめることで地域的特色を捉え、それを基に課題を見付けたり発表したりしようとしている。(第6時)



全員で学級の他の生徒の白地図を互いに見て回っている。よくできていると思ったものには付箋を貼り、その記述内容や表現の仕方を参考にしてている。こうして、他の生徒の記述を見て回ることによって、第7時に作成するレポートをよりよいものに仕上げるための参考としている。

「深い学びの姿③」

生活経験と結び付いた情報を獲得することで、将来関わるであろう世界の現状や課題について自分のこととして捉え、解決しようとしている。(第7時)



レポートの作成に当たって、生徒が別の生徒に助言をしている場面が見られた。学級全体でアジア州の地域的特色を大観するために、キーワードとその結び付きについて共有した後、個人での作業を行っている場面で、左の生徒が右の生徒に対して、本単元の学習内容とキーワードの関連を説明している。この後、右の生徒は自分でアジア州の地域的特色についてのレポートをまとめることができた。

* アンダーラインは、STEP 1、STEP 2での想定を超えた「深い学びの姿」を示す。

STEP 4 単元全体の振り返り

【成果】

調べ学習によって、生徒が地域の多様性に目を向けることができた。アジア州は、東アジア・東南アジア・南アジア・中央アジア・西アジアがそれぞれ独自の地域的特色をもっている。一人一人の生徒が担当した地域を調べ、他の地域と比較することで、その地域の独自性に気付くことができた。

発表した内容、自分の担当した地域を他の生徒の発表と比較・関連付けて白地図にまとめることで、知識の活用とその深化を図ることができた。また、他の生徒の白地図やレポートを評価することによって多角的な見方に気付き、それを自らの白地図やレポートに取り入れることによってアジア州への理解を深めることができた。また、アジア州の課題について自分のこととして捉え、解決していこうと考えることができた。

【今後に向けて】

単元や授業のねらいが生徒に明確に伝わっておらず、学習の見通しが十分ではなかったので、「〇〇州の気候と地形」や「〇〇州の農業」等、主題を絞った上で、主題に対して予想を立てさせることにより、学習の見通しをもたせたい。

ジグソー学習で、想定した「深い学びの姿」につなげられるように、知識補充のためのワークシートを用意するなどして、基礎的知識の補充と定着を徹底する必要がある。

ワークシートの相互評価がやや不十分で、その後自分のワークシートやレポートの改善に生かせない生徒がいた。活動の時間を十分に確保した上で、生徒が互いに見て回った後、自分が付箋を貼って評価したものについては、その理由を発表させてよさを共有する。また、生徒同士で教え合う姿が見られたので、グループでの学び合い活動を重視し広めていくことで、深い学びに結び付けていきたい。

基礎的な知識及び技能の定着と深い学び

「深い学び」の実現に当たっては、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。しかし、平成 28 年 12 月 21 日の中央教育審議会答申では、現行学習指導要領の課題として「課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていないこと」等が指摘されている。この問題は根底で、基礎的な知識及び技能の定着をどのように実現していくかという問題とつながっている。課題解決的な学習か、基礎的な知識及び技能の定着か、というような二項対立を乗り越えた上で、互いをどう生かして児童・生徒の学力を向上させていくかについての具体的な方策が求められる。

本単元で取り入れられたジグソー学習を例

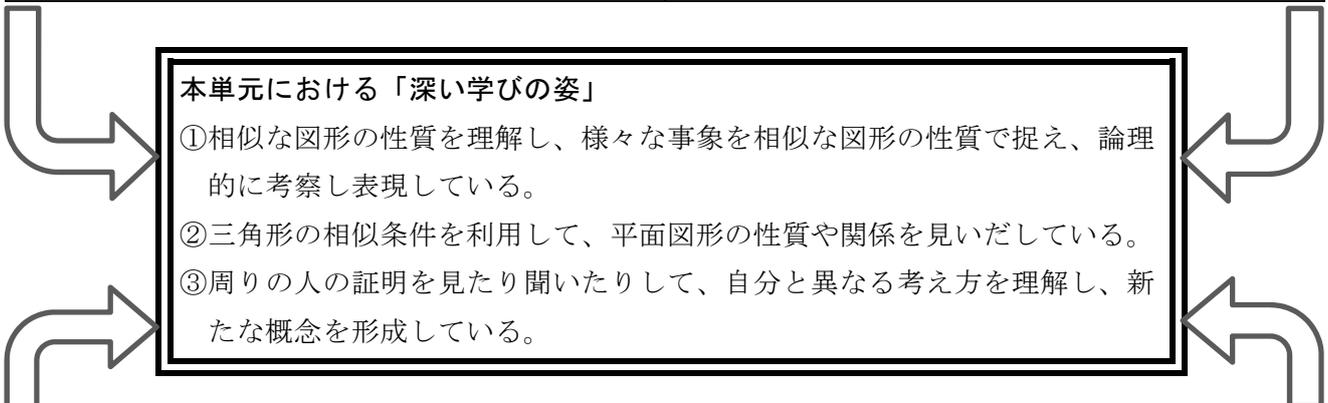
に挙げると、発表する活動だけではなく、発表に向けて調べる段階に焦点を当てることで、基礎的な知識及び技能の習得・定着への効果が期待できる。個別の事実等に関する知識が蓄積できると、それぞれについて類似や関連、相違等、知識及び技能相互の関係性が生じる。これらを新たな課題として探究させていくことで、個別の知識及び技能が相互の関係性を伴ってより強固に定着していく。この知識及び技能相互の関係性が、他にも応用できることに気付いたとき、知識及び技能は汎用的に活用できる概念に関わるものとなる。このように、児童・生徒が獲得した知識及び技能を、思考力・判断力・表現力等を駆使して変化させることが、深い学びの一つの形であると考えられる。

(4) 中学校・数学（第3学年）

単元名	相似な図形（相似な図形、三角形の相似条件）
-----	-----------------------

STEP 1 「深い学びの姿」の想定

本単元で育てたい資質・能力			関連する既習事項
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> 平面図形の相似の意味及び三角形の相似条件について理解すること。 		<ul style="list-style-type: none"> 【小学校 第5学年】「合同な図形」 <ul style="list-style-type: none"> ○合同な図形の意味、合同な図形の性質 ○合同な三角形をかく要素の考察と作図 【小学校 第6学年】「拡大図・縮図」 <ul style="list-style-type: none"> ○拡大図や縮図の意味とその性質 ○三角形や四角形の拡大図、縮図の作図 ○縮図の利用 【中学校 第2学年】 <ul style="list-style-type: none"> 「平行と合同」 <ul style="list-style-type: none"> ○合同な図形の性質 ○三角形の合同条件 「三角形と四角形」 <ul style="list-style-type: none"> ○直角三角形の合同
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> 三角形の相似条件などを基にして、図形の基本的な性質を論理的に確かめること。 相似な図形の性質を、具体的な場面で活用すること。 		
学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> 図形のいろいろな性質について予想をし、仮説を立てて、その性質が成り立つかどうかを主体的に解決し、証明しようとする態度 		



本単元における見方・考え方	<p>相似な図形の性質についての基礎的・基本的な知識や技能を活用して、論理的に考察し表現すること。</p>	数学科における深い学び	<p>数学に関わる事象や、日常生活や社会に関わる事象について、「数学的な見方・考え方」を働かせ、数学的活動を通して、新しい概念を形成したり、よりよい方法を見いだしたりするなど、新たな知識及び技能を身に付けてそれらを統合し、思考、態度が変容する「深い学び」を実現すること。</p>
----------------------	---	--------------------	---

STEP 2 深い学びにつながるための単元の指導計画 相似な図形(全 22 時間中の7時間)

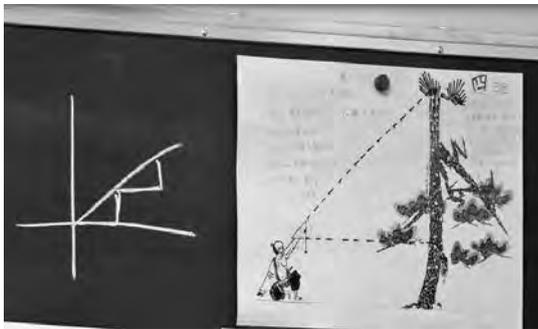
時	目標	内容	期待する「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1 2	江戸時代における、木の高さを直角二等辺三角形を利用して求める仕組みについて理解する。 実際に校舎の高さを測定するための測定計画を立てる。	○直接には測定できない距離や高さを、拡大図や縮図を利用して求める仕組みを見いだす。 ○縮図を利用して調べる方法を考える。	○身近な題材から、日常生活や既習事項と関連付けて拡大図や縮図の考えを利用した測定方法について考える。 ○どのような測定方法が適切か考える中で、図形の性質の理解を深める。 「どんな三角定規を使おうか？」 「三角定規を地面と平行にするにはどうしよう？」	○工夫次第で多様な解法が出る課題を提示し、思考力や想像力を生かし、自分の考えを自信をもって発表できるようにさせる。
3	実際に校舎の高さを測定する。 直接には測定できない距離や高さを、縮図を利用して求めることができる。	○相似を利用して、実際に校舎の高さを求める。 ○直接には測定できない距離や高さを、縮図を利用して求める。	○他のグループの測定方法や結果からも比較検討し、校舎の高さの求め方を論理的に考察する。 「正確に高さを求めるには、何が大切か？」 「拡大図・縮図を正確にかくにはどうしたらよいのだろうか？」 「縮図が正確にかければよいのでは。」	○正確に測ることの難しい高さを測らせることで、困難さを理解し、実測に頼らず論理的に考察するよさを理解させる。数学的に推論することや論理的に考える姿勢を身に付けさせる。
4	相似な図形の意味と性質を理解する。 相似比の意味を理解し、相似な図形の辺の長さを求めることができる。 相似の位置にあることを理解し、相似の位置にある図形をかくことができる。	○図形の相似の意味と表し方を知り、性質を調べ確認する。 ○相似比の意味を知り、相似比を利用して、相似な図形の辺の長さを求める。 ○ある図形と相似の位置にある図形をかく。	○前時の実験を意識しながら相似な図形の性質を考える。 ○相似の位置にある図形を複数かき、180度回転した図になった場合などについても考察する。	○相似な図形の意味や性質の理解を深め、知識を定着させる。 ○相似な図形をかくことにより、相似な図形のイメージを豊かにさせる。
5	三角形の相似条件を理解する。	○ある三角形と相似な三角形をかくためには何が分かればよいか考え、三角形の相似条件を確認する。	○相似比が1:2である相似な三角形をかくことを使って、相似条件を考える。「相似条件だけで考えると、2組の角が等しいだけでよいが、2倍の図をかく場合は辺の長さが必要になるよ。」	○合同条件を基にして対比させることにより、相似な図形の条件を考えさせる。
6	三角形の相似条件を利用して、図形の性質を証明したりすることができる。	○三角形の相似条件を利用して、図形の性質を証明する。	○口頭で指示された図を各自がかき、その中から相似な三角形の組を見付け証明する。 「三つの相似を証明するときは2組証明すればよい。」	○裏返さないと相似の位置に置けない図形を取り上げることで、直観的でなく論理的に確かめさせる。
7	相似な図形についての理解の定着を図る。	○相似な図形についての問題演習をする。	○難易度の高い証明問題では、解き終わった生徒がヒントを考える。ヒント（正解がすぐに出るものでなく）を調整して提示する。	○問題を複数の生徒で証明させ、最後に全員で修正・追加・確認させる。自分の証明と比較しながら、他の考え方や表現の仕方を取り入れやすくする。

STEP 3 授業の実施・観察

「深い学びの素地づくり」

木の高さの求める課題に対して、今まで習得した知識及び技能を活用して探究している。

(第1時・第2時)



第1時では、単元の導入のため、相似な図形の性質や三角形の相似条件を使わず、既習の知識の範囲で解決法を考えさせた。小学校での拡大図・縮図から考察する生徒が多かったが、直前に学習した単元の関数を利用して解決法を考えるなど、多様で独創的な方法が発表された。発表に際しては、個人での自力解決の時間とグループによる解決の時間が設定され、他者と協働して課題を解決していく場面も見られた。

第2時では、各グループで前時の振り返りを行い、他のグループの考え方も考察し、まとめた。また、1グループは2グループ、2グループは3グループというように、指定された他のグループの考え方を全体に説明した。その発表の準備をグループですることにより、自分たちと違う考え方を理解し取り入れ、整理することができた。

「深い学びの素地づくり」

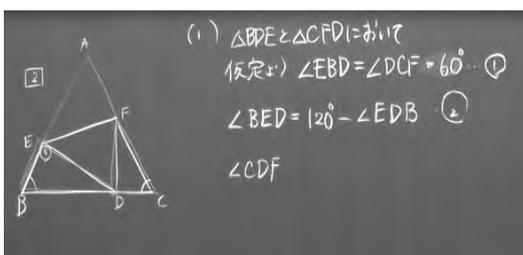
実際に校舎の高さを求める数学的活動を通して、事象を論理的に考察しようとしている。(第3時)



前時で考えた測定計画に基づき、実際に校舎の高さを測定する。測定結果は、グループによってかなり差が出た。その結果についても考察し、問題点や原因を追究することにより、今後の学習につながる。測定の際には、相似な図形が利用されていることを理解させ、相似な図形に対しての関心・意欲を高めさせることができた。

「深い学びの姿②」

三角形の相似条件を利用して、平面図形の性質や関係を見いだしている。(第7時)



相似な図形の一つの問題を複数の生徒で少しずつ証明する。途中で解答ができない生徒がいたときには、ヒントタイムで周りの生徒がヒントを考えた。ヒントは、すぐに正解が出るものではなく、ヒントを出す生徒が調整し、提示していた。「∠EDBを使えば」、「 $180 - 60 = 120$ 」など間接的なヒントを考えていた。「それは分かっているよ」、「それは出し過ぎ」等ヒントに対しても周りが評価し、適切なものにしていった。

STEP 4 単元全体の振り返り

【成果】

本単元は、全 22 時間であり、その前半の 7 時間で検証した。単元の最後に深い学びを求めるのではなく、濃淡はあるが、どの授業でも深い学びにつながる工夫をし、統合的・発展的に考察させていた。

第 1 時の導入において、既習の知識を活用し、関連付けて整理しようとする姿勢があり、各々が思考し多様な解法が発表された。また、先人の知恵や日常生活と結び付けることにより、相似な図形への興味・関心を高めた。第 3 時では、実測することにより相似の利用の有用性の理解を深めた。これにより、その後の学習への意欲を高め、主体的に取り組めるよう工夫していた。

第 4 時で相似な図形の性質の理解を深め、第 5 時では相似な図形をいろいろな方法でかくことにより、見方を広げた。第 5 時以降、与えられた図形の中の相似な図形に着目し、相似な図形の性質や相似条件を活用することができるようになった。第 6・7 時で複雑な図形を取り上げ、論理的に表現する力を高めさせた。最終的に単元の後半（三角形と比、平行線と比）では、生徒自身による多様な証明ができるようになっていった。

【今後に向けて】

STEP 1 で「深い学びの姿」を具体的に想定することは大切であるが、実際に授業を行う際には、STEP 2 で「深い学びの姿」につながるような指導計画をいかに立てられるか、どのように指導を工夫できるかが重要である。今回の検証授業においては、1 時間ごとに多様な方法で生徒に働きかけ、単元全体として深い学びになるように工夫していた。意図的な働きかけや場の設定により、生徒自ら探究し、深い学びの姿が見られた。その工夫の仕方は、タイミングや内容によって効果が大きく異なってくる。目の前の生徒の実態を把握し、的確な計画を立てることが不可欠である。

深い学びの前に

検証をする中で、「深い学びにつながる授業」を実現するには、その土台として前提となる条件や要素があるのではないかと考えた。

中学校数学の実践例は、習熟度別指導における比較的数学が得意な生徒の集団であり、意欲も高く、グループでの対話による活動も円滑に行われていた。しかし、詳しく訊いてみると、担当の教師の入れ替わりにより、授業者にとっては本単元がこのクラスで行う初めての授業であった。そのため、全員の生徒の顔と名前が一致せず、今まで直接指導したことのない生徒もいる状態であった。それでも生徒は授業者の問い掛けに敏感に反応し、意欲的に取り組み、積極的に自分の考えを発表していた。また、グループでの話し合いの場面でも、初めてとは思えないほど意見を出し合い、活発に進めることができていた。

本検証授業の対象の生徒には、周りの人の考えを理解し、取り入れる態度が備わっており、対話によって学びが広がっていた。これは、他教科（国語科など）との連携による取組の成果である。そのため、違和感なく実施することができているのだと考える。

また、生徒の発言に対して、授業者の反応や取り上げ方が適切で、問い掛けによって更なる広がりや深さを生み出していた。生徒間の発言からも新たな発想を引き出し、柔軟に思考する態度を養っていた。

このように深い学びの授業が成立するには、教師と生徒の関係、他教科も含めた授業規律及び習慣、教師の発問の仕方などが大きく影響する。

「深い学びにつながる授業づくり」の実現には、授業改善とともにその基になる土台を構築していくことが大切である。

(5) 高等学校・国語（第1学年）

単元名	現代でも読み継がれる名作の秘密に迫ろう 小説（三） 羅生門
-----	-------------------------------

STEP 1 「深い学びの姿」の想定

<p>本単元で育てたい資質・能力</p> <div style="text-align: center;"> </div>		<p>関連する既習事項</p> <div style="text-align: right; font-size: 2em;">↶</div>
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・ 比喩表現や情景描写に着目し、象徴する事柄や効果を考えながら文章を読むこと。 	<p>【中学校 第3学年】</p> <p>（構造と内容の把握）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えること。 （精査・解釈） ○ 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えること。 ○ 文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること。 （考えの形成、共有） ○ 文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間・社会・自然などについて、自分の意見をもつこと。
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作品の構成や叙述を基に、登場人物の変容を捉えること。 ・ 作品に込められた読者へのメッセージや名作とされる本の条件等についての考えを広げたり深めたりすること。 	
学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作品に込められた読者へのメッセージや名作とされる本の条件について関心を持ち、すすんで作品を読もうとすること。 	

本単元における「深い学びの姿」

根拠を明確にしなが、ら、「他者との対話」や本の「作者との対話」を通して、自分の考えを広げたり深めたりしている。

<p>本単元における見方・考え方</p> <div style="text-align: center;"> </div> <p>自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること。</p>	<p>国語科における深い学び</p> <div style="text-align: center;"> </div> <p>「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けること等が考えられる。その際、生徒自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのかを問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要であり、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすること等が重要である。</p>
--	--

STEP 2 深い学びにつながるための単元の指導計画（全9時間）

時	目標	内容	期待する 「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1	学習課題を把握し、学習の見通しをもつ。	○「現代でも読み継がれる名作の秘密に迫ろう」という単元全体の目標をつかむ。 ○「羅生門」を読んだ印象や魅力について感想をまとめる。	○自分が名作だと考える作品と「羅生門」を比べさせることで、生徒は「羅生門」への関心を高めている。	○学習課題を把握させることで、学習の見通しをもたせる。
2	「羅生門」の大体の内容を把握する。	○中心人物、対人物、中心人物の変容とそのきっかけをまとめる。	○「羅生門」と「羅城門」とを読み比べることで、作者の意図について主体的に考えようとしている。	○相違点をまとめることで、課題を明確にさせる。 ○ジグソー学習により、作品について多角的に捉え読み深めさせる。
3	「羅生門」の典拠と読み比べる。	○「羅生門」と「羅城門」（「今昔物語集」）を読み、相違点（①下人②老婆③結末）をまとめる。		
4	相違点から作者のメッセージを考える。	○3人で1グループをつくり、「羅生門」に込められた作者のメッセージをまとめる。		
5	下人・老婆・結末の視点で文章を読み深める。	○役割分担を行い、「下人」、「老婆」、「結末」の視点について前時でまとめた作者のメッセージの根拠となる叙述をまとめる。 ○グループ内で報告する。	○グループのメンバーに報告するために、自分が担当した視点で文章を主体的に読んだり、他者と話し合ったりしている。	
6	作者のメッセージについて解釈する。	○視点ごとのグループで、作品に込められた作者のメッセージについて交流する。		
7	「羅生門」の魅力について考えをまとめる。	○「羅生門」に込められた読者へのメッセージを基に、現代でも読み継がれる作品の魅力を自分なりにまとめる。	○名作と言われる作品は、現代でも共感できる要素があることに気付く。	○現代の名作と比べさせることで共通点を意識させる。
8 9	芥川龍之介の他作品の魅力をもとめる。	○芥川作品（「鼻」、「芋粥」、「地獄変」等）と典拠を読み比べ、作品の魅力をもとめる。		

STEP 3 授業の実施・観察

「深い学びの姿」

根拠を明確にしながら、「他者との対話」や本の「作者との対話」を通して、自分の考えを広げたり深めたりしている。

第2時：「羅生門」の大体の内容を把握する。

第5時：下人・老婆・結末の視点で文章を読み深める。

第6時：作者のメッセージについて解釈する。

第7時：「羅生門」の魅力について考えをまとめる。

第2時



第2時では、「羅生門」の設定を把握する学習において、「雨」、「にきび」についてイメージしたことや、言葉から受ける印象を発表し合い、象徴について理解を深めていた。その後の読み取りでは、文章中に上記以外の言葉で何かの象徴になっているものはないかを考えながら読む生徒がいた。

第5時



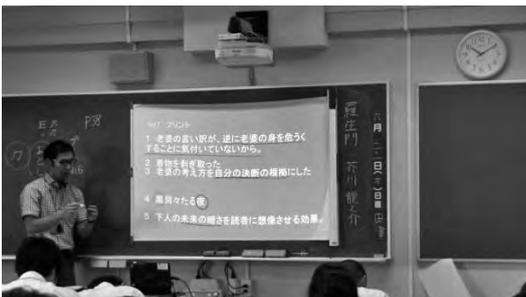
第5時では、老婆に対する下人の心情について、生徒Aは、叙述を根拠に「六分の恐怖と四分の好奇心」と説明した。その際、生徒Aは、叙述からなぜそのように考えたのか、自分の生活経験を理由付けして説明することができた。生徒Aの説明を聞いたことで、自分の生活経験と結び付けて考えるようになった生徒が見られた。

第6時



下人を視点に文章を読んだ生徒Bは、「羅生門」において、下人が最初から盗人として描かれなかったところから「それまで正しいと分かっている、考えは変わってしまうことがあることを作者は伝えたかったのではないかと考えていた。グループ学習での意見の交流を通して、「にきびは下人の若さを象徴し、下人の揺れる心を示しているのではないか。」と、自分の考えを支える根拠を増やしていた。

第7時



ジグソー学習での学びを基に、登場人物の言動や心情の変容について、社会状況や登場人物が置かれた境遇を加味しながら、「生きる」ことについて考えを深めていた。また、現代でも共感できる考えがあることに気づき、普遍性について考えることができた。

* アンダーラインは、STEP 1、STEP 2での想定を超えた「深い学びの姿」を示す。

STEP 4 単元全体の振り返り

【成果】

検証授業では、「深い学びの姿」につながるように、「学習過程の工夫」、「多様な視点で文章を捉えさせるための工夫」の二つの手だてを講じた。

「学習過程の工夫」では、単元の見通しをもたせるために、現代でも読み継がれる名作の条件についての考えをまとめる活動を取り入れることを生徒に示した。生徒は、単元のゴールを具体的にイメージし、目的意識をもって教材を読み進めることができた。また、単元の終わりに、生徒自身が選んだ作品を扱う活動を設定することで、教材を通して身に付けた力を活用させることができた。

「多様な視点で文章を捉えさせるための工夫」では、ジグソー学習を取り入れた。典拠との読み比べから生徒が発見した相違点を視点に、生徒は文章全体を意識しながら、多様な視点で読み深めることができた。

以上の手だてにより、STEP 1 で考えた本単元で育てたい資質・能力を生徒は身に付けることができた。

【今後に向けて】

一方で、検証授業を通して次の2点の課題が明らかとなった。

第一は、限られた時間の中で生徒にねらいを達成させるための手だてを吟味することである。例えば、第3時のねらいは、「羅生門」の典拠と読み比べることを通して、作者の意図が表れている事柄に着目させることであった。しかし、授業では古語で書かれた文章を資料で提示したため、読み比べることに難しさを感じている生徒がいた。そこで、現代語訳の文章を資料に用いるなど、生徒が解決すべき課題をシンプルにする必要があることが分かった。

第二は、自分の考えの妥当性を確認する手だてを講じることである。例えば、第4時～第6時では、多様な視点で文章を読み深めることができるようにグループ学習を行った。生徒は複数の根拠を基に自分の考えをまとめることができたが、自分の考えに自信がなく、発言することに抵抗感を示す生徒がいた。そこで、今後の単元では、自身の考えを振り返るための視点を明確にし、考えに対する妥当性を確認させる手だてを講じる必要があることが分かった。

深い学びにつながる話し合い

本実践では、対話的な学びにおいて、生徒同士の話し合いを通じて深い学びの実現を図ろうとした。

意見を言うことに終始してしまったり、一部の生徒が話し続けたり、話し合う内容が逸れてしまったりしている話し合いでは「深い学び」は実現されない。話し合いにおいては、「目的の意識化」、「内容の明確化」、「結果の可視化」の3点が重要である。

第4時では、話し合いを通じて作者のメッセージを考えさせた。話し合いには、問題を解決するための話し合いと個人の思考の深化を図る話し合いがある。教師が、「今日の話し合いでは、〇〇する

ために話し合います。」と目的を明示したり、生徒に目的を考えさせたりする必要がある。また、何について話し合い、何を明らかにするのかといった、話し合う「内容」を示す必要がある。そして、話し合いは音声言語でなされるため、記録しなければ消えてしまう。班員の考えや根拠、質問や回答を書かせた上で、共通点や相違点など話し合いを通して明らかになったことをまとめさせることで、結果が可視化される。

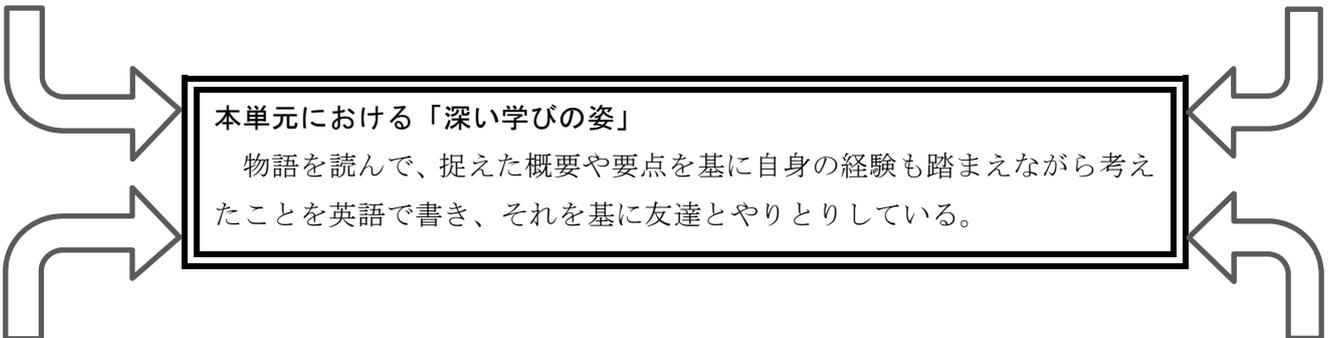
このように、目的や内容を明確にし、結果を可視化させることで、深い学びにつながる話し合いとすることができる。

(6) 高等学校・外国語（英語コミュニケーションⅠ）（第1学年）

単元名	Lesson 6 A Story about Instant Noodles
-----	--

STEP 1 「深い学びの姿」の想定

本単元で育てたい資質・能力			関連する既習事項	
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・物語や説明文を読み、概要や要点を理解すること。 ・語句、文構造、文法事項などについての知識を身に付けること。 		【聞くこと】 ○初歩的な英語を聞いて、話し手の意向などを理解すること。 【話すこと】 ○初歩的な英語を用いて、自分の考えなどを話すこと。	
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・聞いたり読んだりしたことについて、自分の考えを簡潔に書くこと。 ・聞き手が理解できるように適切な発音、速度や表現で発表すること。 		【読むこと】 ○英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解すること。 【書くこと】 ○英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くこと。	
学びに向かう力、人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手が内容を理解しやすいように、工夫して発表しようとする。 			



本単元における見方・考え方	外国語科における深い学び
<p>外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。</p>	<p>言語の働きや役割に関する理解、外国語の音声、語彙・表現、文法の知識や、それらの知識を五つの領域において実際のコミュニケーションで運用する力を習得し、実際に活用して、情報や自分の考えなどを話したり書いたりする中で、外国語教育における「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現し、学習内容を深く理解し、学習への動機付け等がされる「深い学び」につながり、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮されるようにする。</p>

STEP 2 深い学びにつながるための単元の指導計画（全6時間）

時	目標	内容	期待する「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1	本文を理解するために必要な文法事項を理解する。	○知覚動詞、助動詞に伴う受動態、使役動詞の用法の仕組み、意味や働きを理解する。	○エッセイ発表において、聞き手が理解しやすいように伝える項目を精選したり適切な順序に並べ替えたりする。	○帯活動として、授業の冒頭に日常的な話題（夏休みのこと・部活動のこと等）をエッセイとして発表し、聞き手はその内容を評価する。
2	本文を理解するために必要な文法事項を理解する。	○速読教材を使って練習をする。 ○ワークシートを使って、前時に学んだ文法事項の理解度を確認する。	○多様な人々との対話 ○習得した概念	○教師による一方的な説明をできるだけ減らし、生徒同士が協力して学び合う活動として、ペア・ワークやグループ・ワークを取り入れる。
3	Part 1 本文の内容を理解する。	○質問に答えながら本文の内容を理解し、音読練習をする。	（知識）の関連付け ○情報を精査し考えを形成	○新出語彙を覚えるためにペアで練習を行う。本文の内容の理解を確認するために、中心となる発問を位置付けることで、生徒が本文を読む上での視点を意識させる。
4	Part 2 本文の内容を理解する。	○Part 1 本文の音読をして内容を復習する。 ○質問に答えながら本文の内容を理解し、音読練習をする。	○適切な言語材料を活用 ○情報の整理→考えの再構築	
5	Part 3 本文の内容を理解する。	○速読教材を使って練習をする。 ○Part 2 本文の音読をして内容を復習する。 ○質問に答えながら本文の内容を理解し、音読練習をする。		○本文の内容について、簡単な語句や文を用いて教師と生徒がやり取りする場面を設定し、対話的な学びへの意欲付けをする。
6	前時までの学習内容について、論点や考えを整理し、伝え合う。	○本文を通して音読し、内容を復習する。 ○主人公の立場から、本文の要旨や考えを書く。	○物語の主人公について、前時までの学習内容を整理、再構築して自分の考えを書き、伝え合う。	○主人公になりきって本文の要旨や考えを書き、伝え合う活動を設定することで、これまでの学習内容についての論点や考えを整理させる。

STEP 3 授業の実施・観察

「深い学びの素地づくり」対話的な学びの設定（第1時～第5時）



帯活動として、授業の冒頭に日常的な話題（夏休みのこと・部活動のこと等）をエッセイとして発表している。

聞き手が理解しやすいように、伝える項目を精選したり適切な順序に並べ替えたりするなど、「深い学び」を意識した活動を位置付けた。



本文の内容について、簡単な語句や文を用いて教師と生徒、生徒同士がやり取りする対話的な場面を設定することで、本文の概要や要点を捉え、自身の考えの形成に生かすことができた。

「深い学びの姿」

物語を読んで、捉えた概要や要点を基に自身の経験も踏まえながら考えたことを英語で書き、それを基に友達とやりとりしている。（第6時）



物語の主人公について、前時までの学習内容を整理、再構築して自分の考えを書くことを本時の課題とした。主人公になりきって本文の要旨を書いたり、主人公の妻への手紙を書いたりすることで、前時までの学びを振り返りながら内容の理解を図り、意欲的に取り組むことができた。



物語の主人公になって思いや考えを振り返らせることで単元全体を捉え、それを基にグループ内で自分の考えを伝え合う姿が見られた。

STEP 4 単元全体の振り返り

【成果】

本単元において、全6時間中の第6時に深い学びの場면을意識したグループワークを行った。四人一組で、それぞれに担当パートを割り当て、主人公の立場で本文の内容をまとめ、それに自分で考えた文を一つ付け加えさせ、グループ内で交流する活動を設定して「深い学び」について検証した。

単元の終末での「深い学びの姿」につながるように、第1時から第5時までは「深い学びの素地づくり」として単元を捉え、単元の中に「主体的な学び」、「対話的な学び」の場면을意図的に設定した。「主体的な学び」については、単元導入時にゴールの姿を提示することで、解決への見通しをもたせ、毎時間の学習への動機付けとした。また、毎時間、本文の内容の理解を確認するための発問を位置付けることで、生徒が本文を読む上での視点を意識することができた。

「対話的な学び」については、教師による一方的な説明をできるだけ減らし、生徒同士が協力して学び合う活動としてペア・ワークやグループ・ワークを取り入れることで、友達との「情報共有」や「相違点と共通点の発見」等、他者を尊重した言語活動を展開することができた。

これらの「深い学びにつながるための指導の工夫」により、情報を整理しながら考えを形成し、英語で表現したり伝え合ったりする「深い学び」の姿につながる活動となった。

【今後に向けて】

- 与えられた課題について即興で話したり、聞き手や目的に応じて簡潔に話したりするなどの具体的な言語の使用場面を設定し、コミュニケーションを実現する構成内容となるような単元計画の構築が大切である。
- 「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」をそれぞれ別々に扱うのではなく、4技能を結び付けた言語活動を経験させる内容の構成が大切である。
- 本単元では、生徒間で取組の意欲に差が見られた。単元導入でより明確な目標（英語を用いて何ができるようになるか）を意識させることで、「主体的・対話的で深い学び」につながるようにしていくことが大切である。

深い学びにつながる対話的な言語活動

平成28年12月21日中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の別添資料「高等学校における英語科目の改訂の方向性として考えられる構成」の中で、高等学校における英語科目の課題として、以下のように提示している。

- 特に「話すこと」と「書くこと」の能力に課題がある。
- 英語の学習意欲に課題がある。
- 言語活動、特に統合型の言語活動が十分ではない。
- グローバル時代において、英語学習に関する生徒の多様化への対応が必要である。

このような課題に対応するため、関心のあふれる事柄から日常的な話題や社会的な話題まで取り上げ、一層幅広いコミュニケーションを図ることができるようにする。

内容においては、互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視する。また、具体的な課題等を設定するなどして、学習した語彙や表現等を実際に活用する活動を重視する。

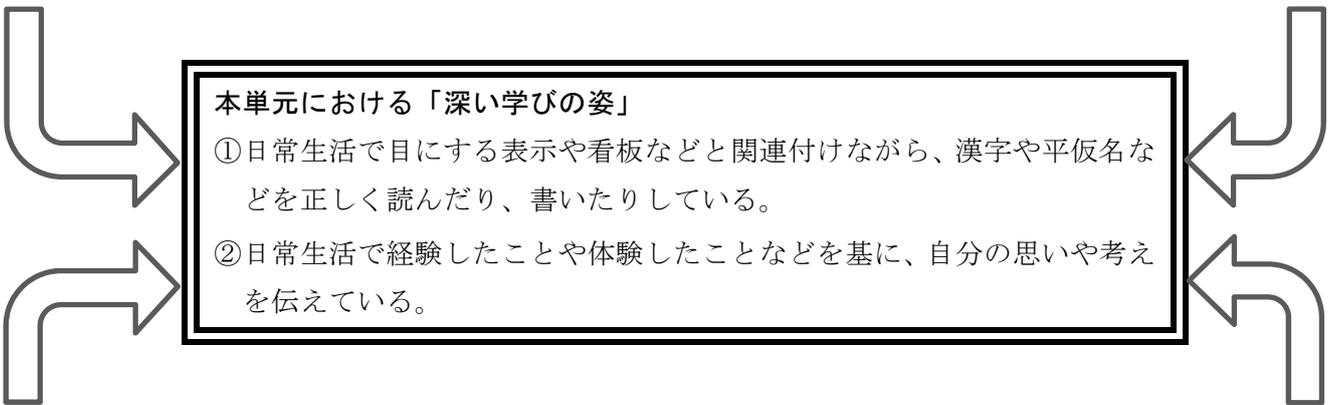
それらの活動を適切に単元の中に位置付けることで、実際のコミュニケーションで活用する力を習得し、実際に活用する活動を充実させ、「深い学び」につながるようにしていくことが大切である。

(7) 知的障害特別支援学校小学部・国語（第5、6学年）

単元名	漢字を読もう —「お金、お店」の漢字を読もう—
-----	-------------------------

STEP 1 「深い学びの姿」の想定

本単元で育てたい資質・能力		関連する既習事項
		 <p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○日常生活でよく使う促音、長音などが含まれた語句、平仮名、片仮名、漢字の正しい読み方を知ること。 ○言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。 ○正しい姿勢で音読すること。 ○経験したことを思い浮かべ、伝えたいことを考えること。 ○相手の話に関心をもち、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや考えを受け止めたりすること。 ○日常生活に必要な語句や文、看板などを読み、必要な物を選んだり行動したりすること。
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活と関連付けながら、漢字や仮名交じりの文を正しく読んだり、書いたりすること。 ・これまでに経験したことや体験したことを基に、自分の思いや考えを相手に伝えること。 	
思考力・判断力・表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・標識や看板などのイラストや写真から、学習した漢字や語句などを探すこと。 ・音読みや訓読みの違いに気付き、正しく文を読むこと。 	
学びに向かう力・人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に向かう姿勢や態度などを身に付けること。 ・日常生活で使う言葉の理解を広げ、表現しようとする事。 	



本単元における見方・考え方	国語科における深い学び
 <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の事柄と関連付けながら、語句や平仮名、片仮名や漢字などの正しい読み方や書き方などを知ること。 ・イラストや写真などを見ながら、自分の考えたことや思ったことなどを伝えること。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活に必要な漢字の読み方や書き方などを身に付けること。 ・人との関わりの中で、伝え合う力を身に付けたり、相手の思いや考えを受け止めたりすること。

STEP 2 深い学びにつながるための単元の指導計画（全5時間）

時	目標	内容	期待する「深い学びの姿」の想定	指導の工夫
1	「十」、「百」、「千」などの漢字を含む文を読むことができる。	○前単元の漢字の復習	○前時の復習の中で、漢字の読み方を思い出したり文を読もうとしたりする。 ○音読テストで、読み方の違いを判断して正しく文を読もうとする。	○学習の定着を図れるように、繰り返し復習する。 ○学習に集中できるように、机上には必要な物のみを出すように指導する。
		○漢字の読み方を知る。 ○読み方を正しく書く。		
2	「読む」、「考える」、「百円」などの漢字を含む文を読むことができる。	○音読テスト 「十円」、「百円玉」等	○音読テストで、漢字や仮名交じりの文を、語のまとまりに気を付けて音読する。	○学習が日常生活とつながるように、生活場面をイメージできる写真やイラストを提示する。
		○漢字の読み方を知る。 ○読み方を正しく書く。		
3	「やき肉」、「お店」などの漢字を含む文を読むことができる。	○音読テスト 「本を読む」、「百円はらう」等	○表示や看板などのイラストや写真から、漢字や仮名交じりの文を見つけて、正しく読んだり書いたりする。	○読む場面と書く場面を区別できるように、製本したドリルと配布するワークシートを使い分ける。
		○漢字の読み方を知る。 ○読み方を正しく書く。		
4	「買う」、「新しい」などの漢字を含む文を読むことができる。	○音読テスト 「お店に行く」等	○日常生活で経験したことや体験したことなどを基に、自分の思いや考えを伝える。 ○町や駅にある看板の写真から、テーマに合う漢字を探したり読んだりする。	○単元の最終回でも全員で音読を行い、学習の定着を図る。
		○漢字の読み方を知る。 ○読み方を正しく書く。		
5	日常生活で目にする表示や看板から、漢字を探したり読んだりすることができる。	○音読テスト 「ノートを買う」など		
		○看板などの写真を見て、学んだ漢字と関連付けてイメージをもつ。		

STEP 3 授業の実施・観察

「深い学びの姿①」

日常生活で目にする表示や看板などと関連付けながら、漢字や平仮名などを正しく読んだり、書いたりしている。

「やき肉」、「お店」などの漢字を含む文を読んでいる。(第3時)

「買う」、「新しい」などの漢字を含む文を読んでいる。(第4時)



日常生活で目にする表示や看板などと関連付けながら、「学きゅう活どう」、「やき肉」、「交通あんぜん」、「自分できめる」、「くじを引く」、「店でノートを買う」、「電気をつける」、「門をあける」、「新しい車にのる」、「かどを右にまがる」などの漢字や文を探して、正しく読んだり、書いたりすることができた。「東京都教育委員会『東京ベーシック・ドリル(プリント教材)』、小学校2年 漢字2-9、2-31を使用」

「深い学びの姿②」

日常生活で経験したことや体験したことなどを基に、自分の思いや考えを伝えている。

「やき肉」、「お店」などの漢字を含む文を読んでいる。(第3時)

「買う」、「新しい」などの漢字を含む文を読んでいる。(第4時)



日常生活に関連したイラストや写真を提示したことで、「知っている」、「行ったことがある」、「見たことがある」など、自分の経験や体験に結び付けて発言することができた。

また、店(みせ)には、店(てん)という読み方があるなどの音読みや訓読みの違いに気付き、正しく文を読むことができた。

* アンダーラインは、STEP 1、STEP 2での想定を超えた「深い学びの姿」を示す。

STEP 4 単元全体の振り返り

【成果】

本単元では、STEP 1 で想定した児童の深い学びの姿を基に、STEP 2 で日常生活と関連した題材や教材などを基に単元を計画したことで、STEP 3 で児童の発言を引き出すことができた。なかでも、本単元の一番の成果は、児童が漢字や仮名交じりの文を正しく読めたり、自分の経験や体験と結び付けて発言したりすることができたことである。

一方、学習したことを家庭でも生かす姿が見られた。例えば、飲料水の表示を「お茶」と読めたり、「兄」や「兄弟」等の家族に関わる漢字に興味をもったりする姿が見られた。また、他の授業でも、学習した漢字を積極的に活用して日記を書いたり、教室に掲示してある表を見ながら、「風」、「紙」、「黒」、「鳥」、「魚」などの学習した漢字を見付けて指さしたりする姿が見られた。

【今後に向けて】

今後、学習したことを日常生活などで生かせるように、単元指導計画の充実を図る。例えば、STEP 1 で自分でメニューを見ながら注文したり、自分で商品を選択して買い物をしたりする姿などを想定した上で、STEP 2 で児童の実態やニーズに応じた単元指導計画を作成することなどが必要である。

日常生活と関連付けた深い学び

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成 29 年 4 月告示）によると、国語の目標は、以下の三つである。①日常生活に必要な国語について、その特質を理解し使うことができるようにする。②日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。③言葉で伝え合うよさを感じるとともに、言語感覚を養い、国語を大切にしてその能力の向上を図る態度を養う。

本単元では、日常生活でよく見掛ける看板や表示などの教材を活用することで、「学びゅう活どう」、「やき肉」、「交通あんぜん」などの漢字や文を正しく読んだり、書いたりする姿を見いだすことができた。また、「知っている」、「行ったことがある」、「見たことがある」など、自分の経験や体験に関連付けた発言をする姿も見いだすことができた。

今後、学習したことを日常生活で生かせる

ように、更に単元指導計画などの充実を図る必要がある。

特別支援学校学習指導要領解説総則等編（平成 21 年 6 月）によると、知的障害のある児童・生徒の学習上の特性等として、「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいこと」等を挙げている。また、国語の指導においては、「日常生活で用いられる初歩的な国語の知識、技能を身に付け、生活の中で生かすことが重要」であり、「家庭等との連携を図り、児童が日々の生活においても人とのやりとりを円滑にできるように、意欲を高める工夫をしながら、一体的に取り扱うこと」が重視されている。

以上のことを踏まえ、今後、「深い学び」の姿を想定しながら、深い学びにつながる授業づくりを行うことが必要である。

第5 研究の成果と今後の取組

1 研究の成果

(1) 「深い学び」の分析

本研究では、曖昧なまま形式的に捉えられがちである「深い学び」について分析し、児童・生徒の「深い学びの姿」を学習した新しい知識及び技能を見方・考え方を働かせながら他の知識及び技能と結び付けていくことや、経験や考え、思い、様々な情報などとも結び付け、児童・生徒自身のものの捉え方や考える方法としていくための習得・活用・探究という学びの過程と捉えることができた。

(2) 「深い学びにつながる四つのステップ」の開発

「深い学びの姿」を捉えた上で、教員が深い学びにつながる授業づくりを意識して実践していけるように、STEP 1からSTEP 4まで順を追って授業改善を図るための「深い学びにつながる四つのステップ」を開発した。

「深い学びにつながる四つのステップ」に沿うことで、教員が目指す「深い学びの姿」につながるよう、指導の工夫を意図的・計画的に行うことができるようにした。また、「深い学びにつながる四つのステップ」の開発の中で、STEP 1について、児童・生徒の「深い学びの姿」を考える手掛かりとなるワークシートとして、「深い学びの姿を想定する際の構成図」を作成した。

STEP 3の授業実践の中で、実際の児童・生徒の姿をSTEP 1で想定した「深い学びの姿」を基にして捉えようとする中で、想定した児童・生徒の「深い学びの姿」よりも多様な「深い学びの姿」を捉えることができるようになった。

(3) 「深い学びにつながる四つのステップ」を用いた授業改善の進め方の検証

「深い学びにつながる四つのステップ」の考え方を基に、検証を東京教師道場の部員による通常の授業において単元を通して行った。その際、検証授業の事前及び事後に、検証授業を実践した教員（東京教師道場の部員）を対象に「主体的・対話的で深い学び」についての意識調査を行った。

本調査の結果から、「深い学びにつながる四つのステップ」に沿って授業を行う中で、STEP 1、STEP 2を通して想定した「深い学びの姿」にとどまらず、STEP 3においては更に多様な「深い学びの姿」を捉えられることが分かった。また、教員自身のもつ深い学びについてのイメージが、単元の指導開始前と比べると指導終了後ではより具体的になることも分かった（表2）。

表2 指導開始前と指導終了後の深い学びについてのイメージの変容例

校種 教科	指導開始前のイメージ	指導終了後のイメージ
理科 小学校	身の回りにはリニアモーターカーやスピーカーなどの電磁石の性質を利用したものがあつて見いだす。	身の回りにはリニアモーターカーやスピーカーは、どのように電磁石の性質を利用しているのかについて考え、説明する。
数学 中学校	平面図形の様々な性質について、三角形の相似条件を利用して証明する。	平面図形の様々な性質について、三角形の相似条件を利用して、多様な方法で証明する。
国語 高等学校	作者の意図について生徒が自らの生活に即して考えることで、作品の理解を掘り下げる。	作者の意図を生徒自身の価値観だけでなく、作品の時代背景や同時代の文献を調べて得た情報も照らし合わせて考え、作品について新たな発見をする。

小学部・特別支援学校 国語	生活経験から見聞きしたことのある言葉やイメージと授業での学習を関連付けて、児童が思いや考えを見いだしていく。	初めて見るものに表示されている文字の中から学習した漢字を見つけて読んだり、漢字が表していることと自分の経験とを結び付けてイメージを広げ、「行きたい」、「食べたい」等の思いや考えをもったりする。
------------------	--	--

この他にも、「指導開始前に設定した『深い学びの姿』は、既習事項等とのつながりから考えたものであったが、『深い学びにつながる四つのステップ』で授業づくりを行うことで、教科としてこれまで学んだことが本単元でも、これから学ぶことにもつながっているのだと感じることができた。」など、深い学びの姿をより広い視野で捉えることができるようになったことが分かった。

さらに、意識調査を実施したことが、教員自身が授業中に「深い学びの姿」として捉えたり多様な「深い学びの姿」を見いだしたりしたことを、具体的な児童・生徒の姿として振り返ることにつながった。特に、想定した「深い学びの姿」と実際に見られた児童・生徒の姿を比較することで、教員は深い学びについての理解が進み、次の指導に生かしていくことや課題を明確にすることができた。

(4) 「深い学びにつながる四つのステップ」を用いた指導計画の提示

東京教師道場の部員による「深い学びにつながる四つのステップ」を用いた検証授業の指導計画を整理し、その単元において「想定した『深い学びの姿』や、その「深い学びにつながるための指導の工夫」を踏まえた実践事例を作成した。

各学校種のそれぞれの教科等における単元の実践事例を示すことにより、学校や児童・生徒の実態、教科等の特性に合わせて授業をつくる際に参考として活用しやすいようにした。

2 今後の取組

(1) 「都教委訪問モデルプラン」等による普及・啓発

東京都教職員研修センターで行っている「都教委訪問モデルプラン」等により、「深い学びにつながる四つのステップ」の普及・啓発を行っていくことが必要である。

(2) 研究成果を取り入れた深い学びにつながる授業づくりの研修の実施

研究成果の普及・啓発の方法の一つとして、深い学びにつながる授業づくりの研修を実施していく。

(3) アクティブ・ラーニング推進校事業との連携

今年度もアクティブ・ラーニング推進校の連絡会において、都教委訪問モデルプランの紹介を行った。アクティブ・ラーニング推進校は平成 29 年度の 30 校から、平成 30 年度には 45 校と拡大される予定である。今後も東京都教育委員会が指定するアクティブ・ラーニング推進校事業との連携を一層推進する必要がある。

また、次期高等学校学習指導要領が今年度内に告示されることを踏まえ、児童・生徒の資質・能力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた研究内容の普及・啓発を更に進める必要がある。